

(近刊著書紹介) 青木裕子『アダム・ファーガソンの国家と市民社会—共和主義・愛国心・保守主義』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2017-06-16 キーワード: 作成者: 青木, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/552

(近刊著書紹介)

『アダム・ファーガソンの国家と市民社会 —共和主義・愛国心・保守主義』

(青木 裕子、勁草書房、2010 年刊)

ひろ
青木 裕子

博士学位論文に加筆修正した私の初の単著が出版されてから、新聞や学会誌等に拙著の書評が掲載され、叱咤激励の言葉を頂いたことにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

(『東京新聞』2011年2月27日(日);『中日新聞』2011年2月27日(日);『経済学史研究』54巻1号、2012年7月、経済学史学会、評者:古谷聡;『イギリス哲学研究』第35号、2012年3月、イギリス哲学会、評者:福田名津子;『政治思想研究』第12号、2012年5月、政治思想学会、評者:森直人;『社会思想史研究』第36号、2012年11月、社会思想史学会、評者:篠原久;他)

また、この本が出版されてから約3カ月後に東日本大震災が起きた。悲しみと不安の中で被災者が耐え忍び譲り合う姿に世界中が感動し、私達日本人は「絆」の強さと重要性を再発見した。絆とは何か?私達は本当に絆で結ばれているのか?人々は何によって社会に結びついているのか?私達は完全に利他的でも利己的でもないからこそ、社会に強く結びつくことができるのではないか——。大震災という未曾有の国難を目の当たりにし、私は、ファーガソンのメッセージをより深く理解しなくてはならないと反省した。

1. アダム・ファーガスンとは誰か

『市民社会史論』の著者ファーガスンは、『国富論』の著者アダム・スミスとともに18世紀スコットランド啓蒙を代表する思想家である。生年月(1723年6月)など、多くの共通点を持ちながらも、思想的には好対照をなすとされることが多い両者は「スコットランド啓蒙の二人のアダム」と称される。経済的人間と経済活動について、スミスが経済学的観点から説明しようとしたならば、ファーガスンは政治的相關物として国家ないしは市民社会という枠組みの中で論じようとしたと言えるだろう。市民社会という言葉にファーガスンは多様な意味内容——政治社会=国家、文明社会、商業社会、世俗社会、あるいは社会そのもの——を持たせていたが、それは18世紀という時代の要請でもあった。「市民社会」の原語が紀元前4世紀に古代ギリシアで生まれた時、それは「政治的共同体=ポリス/国家」そのものを指す言葉だった。しかし19世紀にはその真逆の意味の「ブルジョワ社会」になっていた。この両極を架橋したのがスコットランド啓蒙、そしてファーガスンだったのである。



2. 人々を社会に結びつける「絆」とは何か

ファーガスンが生きた 18 世紀スコットランドでは、分業と商業の発展がもたらす高度な相互依存の体系、市場システムが発達しつつあった。そこでは確かに人々は経済的利益により結びついている。しかし、人間の利害関心は経済的なものに限定されるのか。もしそうならば、人間は一つの社会にとどまることはせず、絶えず利益を求めて移動していだろう。人間がそうしないのは何故なのか。ファーガスンは市民社会とは多様で、経済主体の連合以上のものであると主張した。人々を市民社会に結びつけるものが、交換取引における最大限の利益への期待であるならば、「文明社会／商業社会／経済社会」は「市民社会」とぴったりと重なり合い、もはや社会の一つの発展段階や状態ではなくなり、最終地点になってしまう。そうなれば歴史が示すように、繁栄し栄華を極めた国家は、腐敗と政治的専制から免れることなく没落してしまう。しかし、ファーガスンは歴史の教訓をかみしめて人間本性を考察した結果、それらを回避する道を模索し希望を持つことができた。「利己主義的ではない利害関心」と呼び得るようなものが、市民社会において人々を結びつけていると考えたのである。

人々を市民社会に結びつける経済的利益以外のものは何か。それは、より普遍的な人間本性である。つまり、家族と仲間への愛情や優しさであり、敵への憎悪と怒りであり、好き嫌いの感情であり、共感であるとファーガスンは論じている。敵がいるからこそ友がいて、境界線を引くことができる。国境もそのようにして生じる。ファーガスンの説く友愛は、「博愛」ではなく、敵あるいは他者との間に境界線を引くことによって生まれて強まっていく「友愛」である。したがって、人間同士を結びつけてきたのは、利己主義的な相互作用に先立つ、人間本性にもとづく利己主義的でない利害関心であると、ファーガスンは論じているのである。

しかしながら、経済的な相互依存のネットワークが国境を越えて無限に見知らぬ人々を結びつけていくことができるのに対して、利己主義的でない利害関心は限られた空間の中でしか人々の絆を形成しない。商業／経済社会には、国境もなく国民もいない。ただただ自由な空間が広がり、自由で無数の経済的行為体が存在するだけである。これに対して、仲間同士を結びつける友愛の絆や共感の絆は、既述のように、境界線の外側の人々の存在と相関的である。つまり、人々が利他主義的ではないとしても利己主義的でない利害関心によって結びついてきたのは、常に排他的な、限られた範囲の空間の内側である。

ファーガスンは、市民社会とは個人が「一つの部族ないし一つの共同体を支持する」ように存在するものであると論じる。つまり市民社会を構成するのは人類全般ではなく、利他的ではないが利己的でもない利害関心によって結びついている人々である。アリストテレスと同様、ファーガスンが説く市民社会とは元々は家族であり、村落、部族、国家であり、完全に利他的ではない完全に利己的でもない利害関心によって生まれ、結びついている様々なグループである。一方、ネットを通じて瞬時に災害等の様子が配信される今日、共感も瞬時に広まることもまた事実である。しかし、その共感の強さと持続性についてはどう考えるべきなのか。「グローバルな市民社会」に期待する向きもあるが、遠い所で起きた事をわが身の事のように強い思いを持ち続ける事はあまりに難しい。ファーガスンは、人間本性が自然と紡ぎ出す絆を軸とする社会の重要性を、時空を超えて私達に訴え考えさせる。

以上、東日本大震災の被災者の方々に敬意を表して、そして被災地の復興を祈りつつ――。